

みんなで育てる「たいしの子」vol.5

幼小中一貫教育だより

非認知能力を伸ばす「太子町立学校園」の取り組み

様々な体験を通して、自分の好き・興味を見つけ 将来の可能性を広げる取り組み

町立山田小学校では、3月2日（木）5時間目に、体育館に全校児童が集まって音楽鑑賞会を行いました。大阪芸術大学演奏学科の橋爪伴之教授と管弦打楽器専攻の学部生の皆さんに来校頂きました。トランペット、チューバ、フレンチホルン、トロンボーン、ユーフォニアムで構成され、ドラゴンクエスト序曲から始まり、聖者の行進や水上の音楽よりアラ・ホーンパイプなど音楽の授業で学んだ曲も演奏して頂きました。

演奏が始まると児童は自然と身体を動かしてリズムをとったり、なじみのある曲では口ずさんだり、ニコニコとした表情で演奏者へ感じたことを表現しているようでした。また、曲が終わると、児童は精一杯の拍手で「ありがとう」の気持ちを伝えているようでした。

コロナ禍により様々な面で制限があったここ数年でしたが、ようやく本校でもこのような体験活動ができるようになりました。音楽鑑賞会終了後に演奏に対するお礼のお手紙を各学年で書きましたが、多くの児童が「演奏する姿がかっこよかった」「あんな風に楽器を演奏できるようになりたい」と記していたのが印象的でした。

今後も、児童自身が様々な体験活動を通して感じたことを「きっかけ」としながら、自分の好きなことや、やってみたいことを見つけ、児童それぞれの個性や創造性、可能性を育んでいく教育をすすめていきたいと考えています。



教えて!とくどめ先生!

「非認知能力を伸ばすシンプルな方法」

非認知能力はいったいどのようにして伸ばしていくことが可能でしょうか？それについてお話していきたいと思います。

まず、非認知能力とは、生まれながらに持ち合わせている気質をベースにして、様々な経験と学びから自分自身で非認知能力を伸ばしていくものと捉えてください。この気質というのは例えば、内向的な子であれば、自分と向き合い忍耐力を発揮しながらコツコツと取り組むことができるでしょうし、外交的な子どもであれば、人見知りをせずにどんどんいろいろな人とコミュニケーションを取ることができるでしょう。小学生になるまでの子どもは特にこの気質による影響は大きいものになります。ただ、児童期以降は、自分のことを客観的に捉えることが発達段階に合わせて少しずつできるようになり、自分の意識を明確に働かせることで、行動の特性に大きな変化が見られるようになってくるのです。

非認知能力は、個人の内面に大きく関わる力のため、いくら外から良質なトレーニングを準備したとしても、本人が非認知能力を伸ばしたいという自らの意志を働かせない限りは向上することは難しいものです。

一方、認知能力に関わることで「今から英語の単語を100個覚えるぞ!」というのは、どれだけ意識しても、英単語を覚えるための具体的なトレーニングをしなければ、覚えることはできません。つまり、認知能力の場合は意識も大事なのですが、トレーニングをすることなく修得することは難しいのです。もっと言えば、特定の認知能力の習得のためにスペシャルなトレーニングを子どもに提供すれば、本人の意識以上の効果をもたらす可能性は大いにあります。

つまり、非認知能力を伸ばすためには「もっと成長したい」「グッと我慢できる人になりたい」「仲間と折り合いをつけられるようになりたい」などの意識を自分の中にいかに持ったうえで、行動に移していくことができるかが非常に大切になります。自分自身に何度も何度も言い聞かせることが必要不可欠になってきます。自分の意識で伸ばしていくことこそが、非認知能力を伸ばすためのキーワードになるのです。

次回の教えてとくどめ先生のコーナー「子ども自身が自分で意識して向上させていくために、どう大人がアプローチしていくのか?」お楽しみに!

◆問合せ 教育総務課 ☎98-5533